

## 美術の窓(40)

## 再び肖像画について

大和文華館館長 吉川 逸 治

肖像画は、人間像の美術の究極として、最も重要な絵画分野の一つであり、しかも多くの場合何らかの形で観者と親しい関係で結ばれた人物の表現を核心として成立しているものです。肖像画の制作に、画家は鋭く時代の美術の状況を提示し、おのれの技巧の修練、成熟の経過を表わすとともに、像主の心理の機微から衣裳、調度、家庭環境、社会、政治の事情にいたるまで伝達しますので、私どもの注意を広く、細かく要求します。

肖像はまず真実でなければなりません。その表わすところは、まず、広く人間社会に生きて、年を重ねて成熟した人格のあらわれとしての像主の顔貌です。機微に入って捉えがたい、像主個人の心が中心であって、身体と合致する衣裳にまで像主の生態を写しだします。

画家は、描写の技巧の修練、熟達はもちろん、心理や状況を察知する知覚の鋭敏さと同時に心理の豊かさを備えた才能を要求されます。そして、なによりも誠実であることが大切であります。肖像画は人の心の現れが、像主の心と画家の心と重なり合って成り立ちます。像主の人格が強烈なときは、画家は像主の精神に吸い込まれて、おのれを無にして従いますが、優れた画家が思慮周到に形を整えて、像主の強い精神を正しくあらわす

なら、最高の傑作が生まれます。

かくて、迫真性は肖像画の基本的条件になり、一瞬にして観者の心を捉え、凝視しつづけさせます。歴史や宗教、文学の文書で親しんだ著者の相貌なら、心に焼き付けられたイメージは消え去りがたい現実性をもって、いつでも想起されて、親しい密やかな対話を交わすこともできるイメージとなります。肖像は、像主の精神表現に個性的な性格が強く刻みつけられ、僅かな顔のディテール、眼、瞳、鼻梁、口唇、その厚み、縮り方など、相貌の形状が個々の意味を担って現われます。それは驚くべき個性的な生きた存在となって現存して、消滅することがありません。

肖像画には、ある個人の心と時の視覚的感銘の外に、永続的な心理的印象を与え、さらに恒常的な精神状態の姿として映ずるものがあります。また、鋭い線や清らかな色面で描出されるだけでなく、丁寧な明暗調、陰影描法を加えて、立体感の充実した相貌となって表現されるものがあります。西洋の油彩の肖像画が倫理的内容とか意志的内容を豊かに盛った表現を備えているのに出会うのは、この様な立体的表現や空間的表現の混じった複雑な構造をとるからであります。

軽く薄い画材を使用するわが国の古画の肖像画でも、立体性や空

間性の配慮は決して無視していません。線描による肖像でも、彫像を想わせるような、彫の深い相貌が描かれているものも数少なからず、従って、観者を一瞬の凝視から深い思念へ、祈念へと導く立体性を備えた肖像が作られています。

このような肖像は平安時代の作品、東寺の真言七祖像まで遡れましょうが、頂相図の系統に、立体性、空間性を表現に組み入れて肖像画の絵画美術としての本格的な形成をめざしたものでありましょう。

これに対して、日本絵画の流れのうちには、古くから白描形式の人物表現の系統のうちに、肖像的な制作が引き続いて行なわれ、この系統の作品に人物の性格描出に優れた作品が多く伝えられています。これらは恐らくは、古代の仏師、仏画師の工房伝統のうちに生かされてきた技術かも知れず、仏菩薩像と並んで奈良朝以来作られてきた高僧像の木彫像の性格把握のデッサンの修練のうちから生まれた鋭い性格描写の肖像画群かと想像いたします。また、大和絵の伝統では、当然、歌仙絵や絵巻物のなかから、相貌の癖や衣裳の定型を合わせて約束化された肖像群像が現れ、自然の姿に近づく本格的な肖像画の制作への道が準備されました。



婦人像 桃山時代  
大和文華館蔵



中村内蔵助像(部分) 尾形光琳筆  
江戸時代中期  
大和文華館蔵

季刊 美のたより No.96

平成3年8月15日

発行 大和文華館